

風 狂

第 5 1 号

風 狂 の 会

詩

村の声	北岡 善寿
盲犬図	長尾 雅樹
秋冷の候	高 裕香
結婚記念日	原 詩夏至
愛と社会性	高村 昌憲
大騒ぎの猿たち	なべくら ますみ
塩田平	出雲 筑三

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十五）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

自費出版の夢と現実	神宮 清志
地上の闇から光を放つ（二）	高島 りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十七）	高村 昌憲 訳
-----------------	---------

執筆者のプロフィール

村に戻って独り家に籠っていると
何をしているのでもないのに
いつとなく胸に聞こえて来る声がある
そがな芸もにゃあことをして
何なるこったいや
誰の声というのでもない
それでいて子供の時分に
村で耳にした言葉だから
今では己に投げつけるしかない

俺は農夫で地道に働かないで
遠い都に行って何かを
目指そうとしたのだったか
然りと言おう
ではうまく行ったのか
とても然りとは言えはしない
未だに一文にもならぬ芸もない
つまらんことをしているだけだ
勿論つまらんことをして
名を上げる者はある
そうなるつまらんことは偉いことで
そがな芸もにゃあことをして
何なるこったいや
が残念ながら当てはまらない
俺の方は酔狂が過ぎて
今に見ておれ！と歯ぎしりしても
徒に恥をかきただけだから
やっぱり自分に投げかけるしかない

遠い祖先の声が聞こえるか
見えない赤い三角の目が
遙かに暗闇の向こうをうかがっている
業の軌道を運命に委ねて
白い毛並が房々と全身を包んでいる

前足を立てて
後ろ足を曲げて座った姿勢が
凜として構える行儀のよさに
盲目の佇まいが優雅に存在する爪の先
尻尾が長く地をうねって延びている

吠えることはしない
見えないままで生きている
前足も後足も感覚のままに地を探る
闇の中の喪失の樂園を体感して
口は軽く閉じられて餌物の味を飲む

鼻先は尖って嗅ぐ地表の匂いの糧は
純白の波打つ毛皮に生命の鼓動を糞す
端正に座した生かされることの受容の誇り
耳は全ての音を聞き届けながら幻聴に馴れる
視界の不能の世界が全身を豊んでいる

犬は素直に地上に這いつくばりながら
生きることを他者に縋りつつ
柔軟の構えに従容の意思を示している

蹲踞の姿勢で首を正して
温和であることに負目を感じない肉体がある

定年後の自由時間が約8万時間という
今までの勤務時間よりはるかに長い
もう一人の自分探しの旅が始まったようだ

死ぬまでにしたいこと！
長く生きることも感謝だが、
道をなくした迷子のようにぼつり

西の空に収めようとする夕陽を眺め
大きく深呼吸して
秋の夜長に大きな地図を描く

食べていけるぐらいのお金
家族と友
足腰を鍛えた健康な体を持って

遠い港町で小旗を振るのをやめ
君と鄙びた祭礼の神輿が
村道を横切るのを見つめている
失ったもの
得たもの
まだ見ぬもの
頂の鳳凰の小首が
秋の陽を反射して冷たい
そういえばいつか長い夢をみた
覚め際
見知らぬ何かに向かって
君は敬虔な祈りを捧げていた
誰も笑っていない
泣いていない
そんなふうに過ぎ行く
一つの生
始まりも
終わりも
或いは無く
ただその都度
琥珀色に
翳る穂波の中
気がつけば

電車の運転手もバスの運転手も
自分の行きたい所へは行かない
蕎麦屋の主人もパン屋の主人も
自分が食べる物を作りはしない

職業とか商売とは自分のために
何かを行ったり作ったりしない
愛も自分の欲望や野心のために
行為しないのが本質に違いない

子供がいない夫婦は本当の愛を
終生知らずにいると言わないが
若い儘の男女が語る恋愛感情を
愛の^{しるし}印に聞けなくなったのだが...

自分の感情を抑えない言葉には
偽りの愛しか表せない性がある
学問も文学も芸術も全ての愛は
自分を越えたもののためにある

自分のための愛好家であっても
必ず社会性に目覚める時がある
愛好家が社会性に触れた時でも
最も幸福な愛を表す^{いのち}生命になる

友人たちと一緒にのときは
山道の途中から左へ折れ
峠の方へと歩数を増やす
しゃべりながら
思い立って一人で歩く今日は
右に折れ湖の方へと向かう
誰とも相談しない
無言の行程

湖に向かう方向から
遠く車の音が聞こえ
山をまたがる高速道路の
白い橋も見えて来て
歌なんか口ずさんでみたくなる
バス通りに出ても木々は濃い
両側から覆いかぶさるように茂り
猿たちが群れている
自由勝手に てんでんに

突然騒ぎ出した一匹
周囲一帯に響き渡る警戒の声
連動する付和雷同的警戒の声
野次馬的野次猿(?)たちの声
声を聞きつけて飛び出してきた猿や
子猿を抱えた母猿も
おびえたようにつられて吠える
ガードレールの際まで来た一匹が
わたしに牙をむく

そうだ わたしが手にしていたのは
一本のポール
山歩きの助けにと持っていた
下山してきた解放感に
ちょっと
ぶらつかせてもいたのかも知れない
ポールを脇の下から足元へと添わせ隠すように

彼と目を合わせないように
ゆっくりと歩いた
声を潜め構えた猿たちが
わたしの動きを監視している

少し行き
振り向くと誰もわたしを見ていない
猿たちは
木の実だか
木の芽だか
勝手放題に頼張っていた

ゲン是我が眼目をうたがった
どこかでみたような戦略
知っているのは俺ひとりのはず

味方がくずれていく
それはいつもと逆の光景
いったい誰と戦っているのだろう

普段なら何でもないことが出来ない
見透かされている心
そこまで読んでいるというのか千曲川

あれよあれよと身の危険が迫り
撤退して塩田に陣をしく
やっと手にしたばかりの堅固な城砦

負ける時はこんなにあっさり
しかし優位なる
敵は引き潮のように引き上げていく

相手の大将は姿をみせない
勝って兜の緒をしめよ という訳か
雲海は肅々と山をこえる

次は容赦しないぞ
わからん なぜ許すのかこの好機
初めて背中から汗がしたたった

いな穂はこうべを垂れてきた
いわし雲は静かにゆるやかに
ながれていく



三浦 逸雄 「寝る人」 8号（アクリル・紙）

宮沢賢治は大正一三年に『春と修羅』を一〇〇〇部自費出版し、ついで童話集『注文の多い料理店』を自費出版している。いずれも父による資金提供だった。しかしこれはまったく売れず、すぐに軒下に積まれ、今でいうゾッキ本になってしまった。今この本が出てきたら、どんな値が付くか見当もつかないと言われている。そして中原中也は『山羊の歌』を自費印刷し、限定二〇〇部出版している。そのほかにも自費出版した作家は意外なほど多い。宮沢賢治の本はまったく売れなかったけれど、佐藤惣之助がこれを絶賛して、一部に知られるようになった。これが原稿のまま埋もれていたら、果たして知られるようになったらどうか。

とはいえ、このように自費出版されたものが、将来大きく日の目を見られるのは例外中の例外である。その大半はゾッキ本となって、そのまま埋もれてしまっている。その数は想像するに余りあるほどに多いであろう。とくに現代では自費出版が激増している。一般人の誰でもが本を出版出来る時代となったのだ。よってわれわれの手元にも送られてきた自費出版の本が溜まる、という現象が起こりつつある。ここには現代の出版事情がこれまでと違った状況を現出している意味もある。誰でもが出版出来るというより、多くの自費出版するひとを開拓しなければならない出版界の、切実な事情がそうさせている。

近頃電車に乗って周りを見渡すと、本を読んでいるひとは稀である。そのほとんどが“スマホ”を操っている。ゲームとかラインとか漫画とかそれぞれである。週刊誌も新聞もほとんど見当たらない。これでは本屋さんは売れなくて困るだろう。一〇年ほど以前の報道では、本屋さんの数が三分の二に減り、古本屋さんも同じだとあった。今ではさらに激減しているに違いない。こうなると物書きと出版社は大ピンチであろう。有名作家といえども、本が売れなくて困っていると聞く。二〇世紀の終わりごろから出版社の倒産相次ぎ、今世紀に入ってますます厳しいことになってきている。そんな中で大いに隆盛してきた出版社がある。新宿に大きなビルを構える「文芸社」がそれである。「文芸社」とは何か。ここは自費出版の最大手である。

今の世には小金をもった高齢者が多数おり、彼らの中には本を出版することに夢を馳せているひとが少なくない。新聞広告をみると「あなたの作品を本にして出版しませんか」といった宣伝文句を見掛ける。これに胸躍らせてアプローチすると、原稿を送るように指示される。その通りにすると、あなたのお作はほんとうに優れたもので、間違いなく大きな話題になるだろうと持ち上げてくる。大きな書店に行くと、文芸社の本を並べる棚があり、自費出版された本がずらりと並んでいる。このように文芸社が棚を買い取った書店は全国に三〇〇店あると聞いている。ここに並べてくれるのはわずか一か月である。毎月三〇〇冊くらい発行しているので、それが精いっぱいというところだ。文芸社では本を作る原価に、一〇〇万円位上乗せしてくる。これはボッタクリといわれても仕方ない暴利であろう。べた褒めしてその気にさせて、大きく儲けるという商法が大当たりして、急成長してきた。今世紀に入って倒産しかかった優良出版社「草思社」「日本文学館」「文芸ビジュアルアート」といったところを子会社化している。ますますのご発展というところではある。いっぽうここで出版した人々から、話が違うと抗議が入ったり、芳しからざる話は後を絶たない。

「文芸社」に先行する自費出版の大手に「新風舎」という出版社があった。新聞に広告を出

して、原稿を募り大きく成長していった。ここでは編集も流通もしていなかった。寄せられた原稿は読まないで印刷にまわし、流通もしない。自社で出した本だけを置いている直営書店が一軒あっただけである。さらには五〇〇部印刷といいながら実際はそんなに印刷もせず、カネを取ったらあとは一切連絡もしないというようなことが重なり、詐欺罪で訴えられたり、マスコミから批判を浴びたりして、二〇〇八年に倒産している。その倒産時に、カネは支払ったが、本は出来なかったというひとが約一〇〇〇人に及んだ。こんな程度の低い悪徳出版社に、アマチュアの物書きからの注文が殺到したのだから、大いに注意しなければならない。このほかにも自費出版で発展した末に、倒産した出版社に「碧天舎」「近代文藝社」といったところがある。いずれも倒産時には似たような犠牲者が出ていると聞く。

いつの間にかこの有名出版社でも、自費出版をするようになってきている。確実に利益を出せる自費出版に、一流と見られる有名出版社も、参入しないではいられないといったところかと思われる。有名出版社で自費出版しようとする、原価に二〇〇万円位上乗せしてくる。ブランド料ということだろうが、だからといって売れるものでもないことは言うまでもない。そもそも原価はどのくらいだろうか。編集、印刷製本、流通を含めて、三〇〇頁、四六判、ソフトカバー、一〇〇〇部ということで、だいたい八〇万円位である。この仕様で一〇〇万円前後で出来る出版社は良心的といえる。そのいっぽう、二〇〇万円から三〇〇万円くらいかかるところがある。そのほかに三〇〇部くらいを印刷製本して、そのまま渡してくれて、五〇万円から六〇万円というところもある。

ネット検索してみると、自費出版してくれる出版社はいろいろある。良心的な出版社も数多いので、よく調べてから選ぶことこそ肝要であろう。普通の出版社なら、まずいい本を作るために編集に力を注ぎ、流通にもそれなりに手法を尽くす。一般の自費出版希望者は、文章作りは素人なので、本として恥ずかしくないだけの文章を作るために、編集の苦心を要するところである。とはいえ一般人は直されることに抵抗を感ずるひとも多く、あまり厳しくするとやめてしまうことにもなり、ほどほどにして妥協することになる。よって素人の文として出回るので、自費出版はいよいよ売れなくなる。場合によっては、編集部が代行して文章を書くこともあるし、まったく文は無くともゴーストライターが出向いてきて書いてくれることもしている。最近の自分史にはこの方法が隆盛していると聞いている。

自費出版でも売れるジャンルというものはある。海外旅行記と海外駐在員の現地報告が一番売れる。これから海外へ行こうという人はこうした本を参考に買うであろう。しかもこのジャンルには特に専門の書き手は居ない。いっぽう売れないのは詩集、次いで小説・エッセイといった純文学。このジャンルには有名作家が居り、彼らも売れなくて困っている。そこへ無名の新人が割り込むのはまったく不可能ということになる。賞でも貰って、それが話題にでもなっていれば別だが。

倒産した新風舎から出版された絵本が、皇室で愛読されていることが報道されてベストセラーになったことがあった。しかしこのとき、この作者には一銭の収入も入らなかった。印税を支払うという契約がなかったからだ、と新風舎では言った。この一件でもこの出版社の評判が悪化する大きな要因となった。印税ということについても出版社の姿勢が問われるので、見積を取るとき見逃してはならない。初刷りは印税なし、二刷りから八%というケースもあり、初刷り四%、一〇〇〇部以上売れて六%。一万部で八%というところもある。中には初刷りから何回増刷して

も三〇%というところもある。

そもそも印税というものは、出版社がその費用をすべて負担して、売れたときにその定価の一〇%くらいを著者に還元するというものである。自費出版のように、すべて著者が出版費を負担している場合には、売れたときの出版社へのリターンは、著者に還元されていい筈である。一冊の本が売れると、その定価の四五%を書店と取次店が取り、残りの五五%が出版社に還ってくる。これを売上還付金として、著者に還元するという考え方があっていい。なかには五〇%を支払うとした出版社もあるし、三〇%のところもある。著者と出版社で分け合って、お互い売れたら売れた分だけ幸せになりましょう、という趣旨だ。それほど売れるわけでもないのだから、こんなことはどうでもいいようなものではあるけれど、出版社の姿勢という点で評価できるのではないだろうか。

自費出版を試みたいなら、ネット検索してよさそうなところに原稿を送って、見積を取ってみるべきである。見積を取らなくても、だいたいの費用は分かるようになっている出版社が多い。これと見当を付けたところに原稿を送付すると、その作品を素晴らしいとべた褒めしてくる。是非ともいい本を作るから、応援させてほしいと持ち上げてくる。自費出版といわずに、「共同出版」「協力出版」といった言い方もよく使われる。これは実態は自費出版そのものだが、いかにも選ばれた著者に協力しようという姿勢と錯覚させられる。言葉を尽くして褒め上げ、いい気持ちにさせてくれる。これが自費出版の商法であって、その言葉に舞い上がってはならない。

ところがここがじつは難しいところである。何か書いてそれを発表しようとする者なら、口先で何と言おうと、腹の中では自分ほど上手い者は居ないと思い込んでいる。そうでもなければ書いたものを発表など出来るものではない。「自惚れる」ということも、一つの才能であり、いい文章を書く上で必須のことなのだ。人の心を惹き付けるためには、どれくらい自惚れることが出来るかにかかっていると言っても言い過ぎではないかも知れない。謙虚な人なら、鑑賞家になるか、ディレタントになる。自費出版をしようというひとなら、自信過剰といわれても仕方ないくらいの自惚れ屋である。ここに舞い上がる要素がたっぷり潜んでいるわけだ。この一点によって新風舎なり、文芸社のような自費出版社の大隆盛がもたらされたのである。言葉を尽くして褒め上げられてすっかり舞い上がってしまう、という危険性が、大金をボッタクられることに直結している。

あちこちから見積を取って、いろいろ経験を積み、時間をかけているうちに、しだいに冷静になってくる。納得できるまで粘るべきである。複数の出版社から見積もりを取れば、いずれどこかの出版社には断ることになる。ここがなかなか劇的なところで、この客は掴んだと思い込んでいるところへ、断りの伝達をすると、いきなり怒り出したり、泣き言を並べたり、様々な人間模様を観ることになる。さんざんべた褒めしてきたのに、手のひらを返したように「こんな下手な文なんか誰が読むものか。うちで徹底的に編集すれば間違いなく売れるものを。印刷して貰って自己満足すればいい。ISBNなどつけるな」と捨て台詞を吐く者さえある。じつをいえばこの辺が本音なのだ。こんな言葉を吐くのは三流の出版社かというと、一流の有名出版社の担当者でも同じである。一流と目される有名出版社でも、それだけ経営的に厳しい状況にあるのだろう。

それでもそうした原稿があるなら、やってみるべきではないか。大きな何かを掴むことは間違いない。見ず知らずの人が買ってくれるということはロマンであり、経験した者でなければこの喜びは分からない。読んで共感してくれるひとが一人でも居れば、これは財産である。最初の宮

沢賢治、中原中也の例もある。公刊してみなければ何も始まらない。発表して世に問うことである。大きな夢を見るのも才能なのだ。（了）

『趙根在写真集 ハンセン病を撮り続けて』をめぐって

ハンセン病療養所の多磨全生園を再訪した趙根在（チョウゲンジェ）は、前回の訪問で親しくなった在日朝鮮人の金子さんに園内の写真を撮りたいと伝えた。すると金子さんは「どんな協力もするけれど、写真はむづかしいな、ここの人達は、故郷と本名を知られることと、写真は絶対いやがるんだ。ボクたちの場合でも、外国人登録の写真さえ拒否しているんだ、写真なしの登録証だよ、よその国に住むボクたちさえ、そんなだから日本の人は、写真と聞いただけで震えがくる人がいるくらいなんだ、写真はむづかしいな……遠くから横とか、後姿とかなら前例がないわけではないけれど……」と言うのだった。それを聞いた趙は「写真を恐れ嫌がるのは、故郷の肉親への思いやりがあるにしても、自分を恥じているからだ、自分を否定しては、解放の闘いや自由を獲得することはできない……」と返す。

趙が言うようにハンセン病患者が自らを恥じ、自己否定に陥っている側面もあるが、それは周囲の著しい偏見と激しい差別が大きく絡んでいるからだろう。

映画「あん」（監督・脚本：河瀬直美、原作：ドリアン助川）では、そのような偏見と差別が日常の中に、いとも簡単に入り込んでしまう日々が描かれている。ある日、永瀬正敏が扮するどら焼き屋の店長・千太郎のもとに、素性の知れない年老いた女性・徳江（樹木希林）が「アルバイトに雇って欲しい」とやってくる。初めは相手にしなかった千太郎だったが、徳江の作った餡のおいしさに驚き、雇うことにする。彼女が餡を作るようになってから、どら焼きは飛ぶように売れ、店は大繁盛だ。しかし、幸せのときは長くは続かなかった。徳江がハンセン病だったらしいという噂が立ち、小さな町にあつという間に知れ渡った。客足は遠のき、店は開店休業状態に。そして徳江も姿を消した。因みにこの映画では多磨全生園が舞台の一部として使われ、入所されている方もエキストラとして参加している。

遡って1974年に公開された映画「砂の器」（監督：野村芳太郎、脚本：橋本忍&山田洋次、原作：松本清張）では、幼い頃の主人公がハンセン病の父親と差別を受けながら放浪する姿が描かれている。原作ではさほど重点的には描かれていなかった放浪の部分を、映画ではかなりの時間を割いて描いている。サスペンス映画という方法を取りながらも、監督や脚本家が何を一番描きたかったのかという思いがひしひしと伝わってくる作品だった。

話を元に戻そう。静かに趙の話聴いていた金子さんは「役員会議があるから、提案してみる」と約束し、一週間後、「同胞に限ってならいけそうだが、ただし了解された場合のみである、了解の取りつけは我々の会が協力する、盗み撮りは絶対にしない、それができるならいつでも来なさい」と伝えてきた。そうして趙の3度目の全生園訪問となったのだった。

写真撮影のため最初に訪れたのは内科病棟だった。金子さんがひとりふたりと声をかけていったが、劣ってはくれたものの快諾は得られなかった。3人目に声をかけたのが杉原さんという方で、両眼は失明、手脚の損傷も激しかった。ベッドから静かに起き上がった杉原さんに金子さんは「タバコつけましょうか」と尋ね、頷く杉原さんの唇にキセルをあて、要領よく煙草に火をつけた。煙草を吸い終わったあと、ふたりはしばらく雑談を交わし、金子さんは頃合いを見計らって「杉原さん、お客さんが来ているから紹介します。同胞の若い写真家で私たちの生活を記録

して、社会や祖国の同胞に訴えたいと取材に来ているんですよ、杉原さんもできたら協力してあげてください」と伝えた。すると杉原さんは驚きながらも「私が役に立つのなら遠慮なくなんにでも使ってください。こんなになって残念ですが、故郷を離れて長くなりましたから、私が誰だかわかる人ももういないでしょう……」と言い、そこから趙の初めての写真撮影が始まった。

趙は大写し、半身、全身、周囲を入れ込んだ全景とシャッターを切っていった。そしてもう一度、先ほどのようにタバコに火をつけて欲しいとお願いし、撮影したのが「病棟を見舞う」（1961年 多磨全生園）というモノクロ写真だ。

その2時間後に杉原さんは開腹手術を受けることになっていたが、金子さんも趙も写真撮影が終わり、担当医師がやってくるまでそのことは知らされていなかった。別れ際に杉原さんは「朝鮮に帰る希み薄れつつ 唯もんもんと 月日ふり行く」と自作の短歌を詠った。手術の数日後、杉原さんは還らぬ人となった。（つづく）

*参考文献＝『趙根在（チョウグンジェ）写真集 ハンセン病を撮り続けて』（草風館刊）、カタログ「この人たちに光を 一写真家 趙根在が伝えた入所者の姿一」（国立ハンセン病資料館編集・発行）

第十四章

ところで余りに陰鬱な休暇の後で、私はアルク＝レ＝クレイの軽傷者施設近くに、足を引きずりながら居りました。私がそこで見たもののことは既に述べました。しかし、医者たちのことをこれからお話ししましょうか。この問題について私は長い間、つまり約二週間程考えて沈黙して来ました。でも、ずっと考えていた訳では無く、私のやり方ではありませんが瞬間的な閃きによって考えていました。それは全てが大変誠実な懐疑論者のものと見做していた或るマルクス主義の雑誌を読みながらも、本当の革命的な精神というものからは絶対的に離れていました。これらのことは私を笑わせます。しかし、それは私を下士官の医者たちの処へ立ち戻らせましたし、私の裡に目覚めました。それと同時に私は少しも隠さなかった大変に生き生きとした感情と思い出があります。それは私には隠す理由が決して無いし、読者諸氏にも非常に抑制された散文に大変良く再発見する術を知っているものです。私はここでそれ以上の自由を私に与えます。私がかつて個人的な形式で、大変に平凡であると分かっている感情を何故述べないのでしょうか。それは少なくとも私が我が国で言わなくても、至る所にあり、政治的と読むことを可能ならしめているものです。そして、それ自体の記号化によって全くの嘘つきになっている、と何故私は述べるかも知れないのでしょうか。私に言わせれば、恐らくどんな国においてもありますし、間違いなくフランスにもあります。私たちは人間に対して、殆どの人間に反対させられたり、従順にさせられたりします。そこから一種の均衡が生まれて、一方では反乱が生じ、他方では多少なりとも暴君が生じます。そして、この音が聞こえて来ない隠れた闘争は、開かれた闘争には不完全に対応するだけです。従って私は他の場所よりももっと自由に、もっと十分に今は政治的分析を試み様とすることを十分に理解します。この分析は、暴君たちが正確と見做すのを好む師団では部外者のものです。何故なら、その様にして暴君たちは全ての野営地において味方を発見するからです。これらの予備折衝に関する指摘は、大変に近い処で私を感動させる事例によって、もっと明白になるでしょう。

私はオルヌ県を出ました。そこはナポレオンが治めた第一帝政下において最も逆らっていた県であっても、擬装されて孤立したこの地方を知る人々は、ふくろう党(1)の蜂起の精神が永遠のものであることを理解しています。しかし、この地方を徒歩で回った私の友人は、主としてアランソンやモルターニュの地方には彼が主張する限りは私自身と同じ様な人物を何人も見付けて、大変びっくりしていました。私がそこの地方出身であるのは偶然でないということです。私はそこの地方の人間です。ところが、組織や運動における私の仲間たちは、デュゲ・ド・ラ・フォコヌリやレヴィ＝ミルボアや、最後にはミルランの有権者たちなのです。権力に反対することとは、根気良く向こうへ追いやるのが明らかです。王は、これらの王党派の人々と共に大変に困惑するかも知れません。教育は自然の儘の本性に、付け加えることしか行いませんでした。十五歳の少年の想像力において常にあるのは、声まで模倣する程の或る手本となる人です。ところが最初の本で付与した私の手本となる人は、数え切れない対談を持つ弁護士であり、好み为王党派の人で、仕方なくナポレオン支持者であり、偶然にもブーランジュ将軍(2)支持者であったりしたのです。それ故にこの人は陰謀を企てるまで行ったのです。ところが私は実在する権力者たちへ

の批判に関する声が、その人と一緒に大変良く聞こえました。そして彼が望ましいと判断した権力者たちに関して私は、決して何も彼に同意しませんでした。更に彼が私には尤もだとも、私は調べました。今度はあなたが未開人を理解して下さい。彼は給費生としてパリにやって来て、〈自由思想〉を教えて生活費を稼ぎました。ここでは皆と同じ様に、そして決まり文句を取り除いて、私は私を知る半分の人々によって支えられ、そして他の半分の人々と戦っているのだと思いました。これらの二つの半分の中には、最も異なる人々である両親、政治家、同僚、上司、検査官たちが分散されていました。それ故に交際によるのと同じ様に直接、私は公式の地位と現実の地位の間を、今も既に私が行っているのと同じ様に分析させました。そして今と同じ様に、その時に私は敵の軍隊が臆病に行動することに気付きましたが、それらの行動に対しては恐れずに歩き回るだけで十分でした。でも、何故でしょうか。彼らは野心家であるのと同様に、臆病者でもあったということです。これらの容易な勝利を自由な精神ならどんなものでも知っています。私がロリアンやルアンで先導した一種の政治闘争や、ドレフュス事件とその後にあった運動に対応したものを語っているのではありません。私が時には外国との同盟を受入れたこと、そして治安関係の諸君が時々私を大衆に有利な様にして少しはあからさまな称賛を手に入れたりしたことは、見抜かれて分かっていることと思います。私は、この小さな恥を容易に濯ぎました。私が、その集会はつまらなかったとか重要であったとか語った時に直ぐに私が理解したのは、私に賛成なのは私が半分大胆であり、私に反対なのは私が半分臆病だったことです。従って時々私に賛成なのは一人の人間として半分自由であり、私に反対なのはもう一つの半分の女性警官であることが私に起こりました。あらゆる人々が私の裡に野心を探しましたが、結局のところは企てに関して少し不可能な謎めいた人物であると私を判断したのです。この者には決して野心がありませんでしたし、企てもありませんでした。彼自身としては、どんな種類の独裁者たちに対しても戦った民衆の人でしかありませんでした。私が孤立していなかったことは良くお分かりのことと思います。大学はこれと同じ文筆の鳥を一羽ならず提供しました。しかし、戦争が私たちの敗北を明白に確認したことも明らかです。それから忍耐です。他者を与えることでしか主人から解放されない、とは既に言われたりしません。私が開けっぴろげに政治の未来を拒んだ理由は理解されています。しかし、今はその主要な理由を述べたいのです。そして、それはどんなに思い上がった場合でも、生理学的なものなのです。政治的な闘争が少し継続すると、私は最早繰り返して言うことしか出来ない疲労状態に、直ぐに私を追い込む経験をしました。如何なる政治家でもこの困難を乗り越えませんでした。それはレーニンやドイツにおいて明白です。休息することに極めて巧みなイギリス自身も、私がこれを書いている一九三一年の今も又、政治的に極度の興奮に陥っています。非常に確かなことです。そして、どんな対価を払っても、そこに至らない様に避けなければなりません。

私は軍医たちを全然信じていないと、あなたは思っています。仰る通りです。そこでは私は戦わずに勝利しましたが、それは学者ぶることによって勝利したのです。最初はゴーモンでしたし、砲兵中隊の軍医によるものですが、彼とは私は一言も言葉を交わしませんでした。尤も彼は熱心でしたし、献身的に仕えていることを示していました。独裁者の力とは最早恐るべきものでしかありません。彼は腸チフスに対しての予防接種を私にすることを約束して、そして実行されました。私は年齢により免除されていたのです。少なくとも私を大変に好んでいたT大尉の一寸した過ちが無くても、殆ど全てが軍医の処から動き出しました。軍医は自分の地位によってワクチ

ンには自由でしたので、口に出して私に相談するのを楽しんでいました。私は言いました、「年齢によって私は免除されていますが、もしも私が自由であったとしても、私は止めるだろうと思います」。私は、医者たちについて話を何か付け加えたかも知れませんが、その答えは数日後にやって来ました。というのも、書かれた命令様式に基づいて全てが分かるからです。私は直ちに予防接種のために部隊へ、つまり森へ歩き出さなければなりませんでした。もう一人の大尉が私に命令を伝えました。私は、私の権利を引き合いに出しましたが、医者はこれらの事柄に関して何であっても唯一の判断を下せる人であることを大変理性的に答えました。私は遅刻した者と一緒に出発しました。そして私たちは間もなく池の端にある森に居りました。それは最も美しい季節であり、最も美しい散歩でした。私には議論する考えはありませんでした。その上、その他の数々の危険に立ち向かう決心をさせられるや否や、汚れた水での注射に勇敢に立ち向かわないのは不条理である様に私には思えました。注射は横柄な手で、それなりに沈黙の中で行われました。帰りに私たちは、砲撃が五百メートル先を上手に突き破っていた一本の道の上に二人して居りました。私たちは敢然と事に対処しました。すると或る歩兵が言いました、「彼らは怖がらない砲兵たちだ」。本当は歩兵たちは、砲弾が無尽蔵にあって神秘の源泉のもの様に見做していました。その代わりに砲兵たちは、砲撃が一つの管理的なものが与えた時に終了することを知っています。爆発音は或る時から聞くのに慣れて来ます。それは地図を見ただけで行う砲撃であって、着弾の調整が無かったのです。その砲撃は、私たちが慎重さに従って行動する時には止まりました。従って私たちは、砲火を通して伝えている者たちには一層大胆な様に見えました。五百メートル先では最早既に勇気を判断することが出来ません。ワクチンに関しては、この薬を部下たちは死ぬ気で飲んでから二十四時間は眠るものと思っていました。私は殆どこの治療に従いましたし、汚れた水の問題も最早ありませんでした。

良くご存知の様に、他の支隊にいる医者たちもおります。私は既にタントンヴィルの軍医のことを話しましたが、彼は生命に関わる数日間だけは歩兵たちに留意するだけで、他に心配していない様に見えました。私は、自分の話をする準備が出来上がった時点で、部下たちを戦場へ送り返すための方針を持っていた医者たちに出会いました。最初に出会った人は保管所の医者で、偏狭で意地悪でした。更に私たちが素っ裸でいたことは恐らく想定外です。ところが彼は理性の働きを見出しましたし、決してその儘にして置きませんでした。「休暇に入る時に治るでしょう。あなたも休暇に入ったから治ったのです」。彼はどんな希望も閉じ込めて仕舞いました。しかし私は立派な話を用意しました。「私は表現するために如何なる不平もありませんでした。私は任務に戻る状態にあるのかどうかを単に自問するだけで、それを決めるのはあなたです」。彼は私を更に学者たちの方へ送り届けましたが、彼らはグレイ駅で仕事をしていました。私の話は絶対的に本心からのものでなかったことに気付いて下さい。ヴェルダンに怖かったですし、それは大変自然なことでした。グレイ駅では、裸足でいるのは私だけでしたし、私は上半身が裸の歩兵が異常な火傷痕を負っているのを観察しながら待ちました。試験所の責任者でもあった軍医は、気泡の端にコンパスを当てる方法で肌を調べていましたが、この方法で彼は矛盾した解答を手にして、そこに虚偽を幾つも見ました。もしも触診が二回とか一回だけであっても、お分かりの様に触診だけで言うのは困難なことです。私が祈禱所の道具の様に、気泡の端のコンパスを知ったのもそこです。その歩兵はこのちぐはぐな抗争の中で諦めていました。私はどうかと言うと、真っ黒な地面を素足で単に歩くだけでした。私が朝には両足を洗っていたこと、そして全身も洗っ

ていたことで人は十分に思いたいのでしょう。ところが私は、放射線科医の処へ直ぐに移されて、傷ついた足は火花に曝されました。眼鏡を掛けたその人物は若くて陰気でしたが、恐らく自分の仕事に疲れていたのです。彼は先ず私に次の様に言うのでした、「時々足は洗っているのですか」。私は答えました、「はい、時々洗っています」。同じ口調で答える権利を持たない人間を嘲笑するにしても、どれ程十分に臆病でいられるのでしょうか。この若くて哀れな者は、私が友人たちとの夕食時に再び見出すのが好きに違いない人々の一人なのです。私はここで同種のもう一つの事例を引用したいと思います。それは私が証人になるしかなかったものです。それは一九一七年にデュニー飛行場での私の任務が終わった後でした。その兵士は大学教員で、優れた能力を持った自然主義者で、知識と忍耐にかけては比類無き者でした。彼は特にイギリスの天気予報に関する我々の報告書を、秘密の数字にして伝える役目を与えられていました。勿論、彼はまさに完璧に全て行いました。ところが、彼は宿営地で補給を引き受けていた中尉に、食糧についての権利を要求したりしていましたが、彼は私たちの集まりを前にして、そのことを正確な言葉で作成しました。従って彼は数字の上からもその準備態勢を嘆いていました。このことのために中尉は言いました、「多分、君はコックなのですか」その忠実な人間は顔を赤くしました。私が既に見ていた歩兵の顔になりました。そして無言でいます。新米の独裁者になった歩兵は、そのことについて大したことではないと言うのでしょうか。そして今度は彼自身が独裁を行う望みを持って、他の者たちに言葉を曖昧に言うのを私は良く聞きます。独裁が決して行われたくない人々や、独裁を行いたくない人々のことは決して斟酌されません。しかしながら少なくともそんな人々が半分は居りますし、最悪なのです。この些細な事件はまさに反乱の時代に生じます。それが私たちの反乱を説明していました。名誉とは、もっと適切に言うなら、偉大なことよりも些細なことを誇りとします。というのも、その時は恥をかかせる意図しか注視しないからです。

私は同じデュニーの宿営地で、医者たちと一緒に他の災難にも遭いました。一度、一分遅刻したお陰で、私は非常に若い人から罵詈雑言や脅迫的言動を被りました。要するに私には大変に正当な遅れた理由がありましたけれども、私が間違っていたのです。私は彼のお陰で恥を掻きました。しかし私は、別の機会に私のために恥を掻きました。私は未だ若々しくて、ひげを逆立てて、新品の服を着た愚鈍な人の前に居りました。その人は人が良さそうでした。彼は言いました、「ねえ、おじいさんですよ」。それからパリでの危険な伝染病についての話を私にしました。幾つかの質問には答えを望みましたが、それらの答えは愚かなものでしたし、正確には私という人間をものにするためだったのです。その様な検診をしなければならぬ恥ずかしい状況でも、人は良く思われたいのです。私は自分を、民衆の人間であり無学であると感じています。私が独裁者としての奇妙な印象を覚えたのは一回きりです。私がそれを忘れることは決してありません。どんな権力にも拒まなければならないと私は確信した儘です。これは権力者たちに対して最も有効な姿勢であり、そして謂わば最も無礼な姿勢でもありました。自由への道とは今でも明らかになっていないのです。

グレイ駅の無礼な医者が、私の足の骨を検査する時になりました。私は彼が望んだ様に答えられないので、最早一言も言いません。すると私の足は治ったと見做されました。度重なる無礼でしたが、有利な結果も生じました。その無礼が誇りを目覚めさせたのです。それは戦争への真の発条になり、無言の発条にもなります。私が数々の体験を既に話した後で、銃後へ送られる様にならなければならないのは、別の理由からですが、それは間接的なことです。しかし、私

が先程話した小さな恥辱と共に話を終わりにするために認めなければならないのは、そのことに関する間違いは私にあったのです。私が何者であったかは至る所で知られていました。つまり自分の職業としては恥ずかしくないやり方で知られていた一人の教師であり、自分の職業によっても年齢によっても、どんな兵役からも免除されていたのですが、軍隊へ志願した私は特別待遇の取扱いをされていました。私が知られていなかった場合には、私は自己紹介するしかありませんでした。そして私は、臆病にならず不器用にもならず話をし、それらを行う術を良く知りました。そして更に自分のことを話さなくても、直ぐさま階級を拭い去る全てのことを話すためにはアカデミー・フランセーズのやり方があります。大変巧みに部隊のあらゆる人々を軽蔑していた我々の無線技師は、社交界の人の様に、やがて如何なる中尉でも構わず一緒にいたことに私は良く気付きました。これは会話のお陰でした。例えば、私とは全然知り合いでなかったこの理工学校出身の中尉は自分の身なりにもそれを否定しません。私は、ポワンカレ（偉大な人）や仮説としての実用主義的な学説を引用するために少しは話をさせねばならないだけでしたし、如何なる観念の支えもありませんでした。彼はこの出会いを喜んでいたのかも知れませんでしたし、彼は中尉にも必ず言っていた様です。「我々の処には、ここに大変注目すべき人物がいる」。そして、この中尉でさえも五分後には私を、犬の様には取り扱わないに違いありません。しかし、これは私の考えではありませんでした。私に与えられたこの種の尊敬は、私には嬉しくありませんでした。それは私が単に、単純と無知を前提とした人物として尊敬されたいと望んだ人間の様なものです。かくして私は平等を理解します。かくして私は平等を試みます。私は会話に注記を齎しませんし、書いたものにも注記を齎しません。私はまさに知らない様に見えるのを望みますし、それは私が知っていることも忘れる様に仕向けます。少しは私と顔見知りの人々にさえもそうしますし、私は彼らが期待する以下の者の様に見えます。そして彼らは屢々安直な餌食に飛びかかる様に、私に飛びかかります。友人は数人いるだけですし、この種の恐るべき術策を知るのを学んだ沢山の生徒たちがいるだけです。この術策は私には自然なものです。何故なら、いずれにせよ私は、私自身と一緒に動物も生むからです。それは知性の最初の瞬間を拒むための私の方法です。それは宿営地で私に与えられた新しい足場です。要するに私は現在の創意工夫しか資質に期待しません。私はそこで走り回り、そして何時も打ち勝ちます。極めて十分に武装したこの種の反乱を、全てすっかり阻止する術を知るには、軍人しかおりません。しかし私が、何時も使われているが屢々良く隠されていて、本能によるかの如く私に対して敏感なこのやり方の中で見るのものは、あらゆる種類の不公平の唯一の源泉です。それ故に先ずはそのものの中で、そしてどんな人間の中でも、最初に話をする人である連隊長を殺さなければなりません。以上は、私が平和と呼んでいるもう一つの戦いです。（完）

（1）ふくろう党は、一七九三年にフランス西部で結成された反革命王党派で、ジャン・シュワンらが農民蜂起を指導した。

（2）ブーランジュ（一八三七～九一）は、陸軍大臣（一八八六）になり、対独強硬策で人気を高め、第三共和制打倒の中心人物となった。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけてたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ (たかしまりみこ)

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村 昌憲 (たかむら まさのり)

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾 雅樹 (ながお まさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至 (はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄 (みうら いつお)

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第51号

2018年10月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/124023>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124023>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト